注解『七十一番職人歌合』稿（二十二）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第四十七番および第四十八番の注解を収めた。
なお、四十七番から「下」巻に入る。

四十七番　文者　弓取

【職人尽】

【銀葉夷歌集】 寄儒者恋　恋ひこがれ儒学もやめて千話文をかくたりけんたねたりをきたり〈宗意〉　**【人倫訓蒙図彙】** 学者　世俗、学者と称するは、儒者をいふなり。孔子の掟を守りて、仁義礼智信の五常より、五倫の道ををしへ、諸の儒教ををしへ、または、詩経、老荘の道をも、人の乞ふにしたがひて釈し教ゆる、世間出世の名師也。医は医学者、哥は哥学者、それぞれの師有るなり。／儒　儒は、応神帝の御時、阿直岐、王仁等、論語、孝経を持来して、百済国より渡る。これ、日本にて儒のはじめとかや。**【家つと】** 寄儒者恋　袖の涙ひだる君子となりもせで逢はぬつらさは日々に新たに　**【華紅葉】** 寄儒者朝顔　日に新た日々に新たに咲く花の朝寝の人にいかな御意得ず〈猶酔〉／儒者の子息の恋　親仁どのしか

らるべけんや恋の道気を見てせざるはいきぢなき也〈桴雪〉　／　寄儒者恋　なすわざを色にかへよと教ゆれど死ののなんのとよふはのたまふ〈我拙〉　【狂歌種ふくべ】寄兵恋　我が恋は木曽義仲にあらねどもあはづがちなる夜半ぞ物うき〈桂帆〉　【誹諧職人尽】文者　弓取　空蝉は唐の歌にもかくとなん〈徳入〉　椵の月心斗の分限かな〈一雨〉　右所中は人の名歳暮苞〈寥和〉　貌見せは当たらずしかも弓始め〈冠里〉　歌軍文武二道の蛙かな〈正章〉　おもだかや弓矢たてたる水の花〈素堂〉　昔いつ武者六七騎門の雪〈沾徳〉　得手勝手与一は扇射ざりけり〈白峯〉　義経に弁当はぐれ春いかに〈貞佐〉　もののふの紅葉に懲りず女とは〈秋色〉　元日や二日は月の弓始め〈宗瑞〉　照る月や礒にけだかき星かぶと〈沾吏〉　頼政の手心いかに雪の竹〈楚望〉　鬼の名の薊も切らん鈴鹿山〈東風〉　弓取や急度明六つ門飾り〈立葵〉　弓勢は蛇の手を取る雉子哉〈万旭〉　若武者の甲に積もる桜かな〈笙和〉　日に焼けて弓取立つやねむの花〈隣玉川　三入〉　弓取も鉄炮取るやねらひ狩〈兆賀〉　弓取や七日八日の月を友〈重丈〉　弓取の数にも入りし案山子かな〈小田原　居川〉　引けばよる放せばのびる柳かな〈欣洲〉　彼の石に苔の花さくや泉岳寺〈寥和〉　【職人尽狂歌合】右　儒者　門前に降り埋みしを雪の賦もかかで詠むる徂徠派の儒者　……右、かかで詠むる空、など申されし、縁ある詞にてよろしと申すべけれど、さる家の学生ならんには、かかる時には、文作りてこそ心をばやるべけれ。かくては、頭巾はなたぬ道学者流のやうにや。左勝ちて侍り。　／　儒者・儒者　白雪をとかさじ物と朱子学者かたくまろめておく庭の陰　足跡のつくかと雪の唐歌に儒者も韻字や踏みなやむらし　左右、理学と文人のたがひながら、各一家の風にて、ともに洙泗の流れにしあれば、勝劣なかるべし。　／　左　儒者　六芸に通ぜしといふ丘が弟子七十余日雪の初物　左、孔子をさして丘としも申さん事、そのかみ隣にすめるしれ物ならずば、ひがごとすなる伊勢人の某が類とやいはまし。かかることは、恐ろしきまでかしこき事にぞ覚へ侍る。右、……また勝とぞ申すべき。　／　右　儒者　ともし火にかへて文読む白雪はさしづめ徳に入るの門なり　……右、徳に入るの門、興なめならず。左右文武のつがひ、勝劣わかちがたし。よき持と申すべくや。　／　左　儒者　文章のはかせぬ庭は深くして桂も雪に折るるばかりぞ　左、晋書に、桂林の一枝とあるを取らせ給ひて、月の桂も折るばかりと菅原大臣の御母君の詠ませ給へるを思ひて、下の句は続けられしなるべし。儒者にはよくかなひたる詞にこそ。……桂に吹ける家の風、高やかに聞こえて侍り。　／　左　儒者　むさぼれる銀世界ぞと夜の雪をひに見なしつつ文学ぶ窓　左、心高

くつかふ人の独醒の見、さぞ侍る。右、……もつとも勝にて侍り。　／　左　儒者　唐歌の韵は踏むとも文章のはかせはせじな庭の初雪　左、紀伝道儒士いかなる人にか、心にくし。……文章博士、ひとがら聊か立ちまさりておぼゆるはや(マヽ)。　／　右　儒者　ともし火によしなるとても儒者は又しばしふみ見ぬ庭の初雪　……右、ふみ見ぬ庭、よろしけれど、此の類、あまた人々詠み出で給へれば、めづらしげなし。左勝にや。　／　右　儒者　文学ぶ功もともにや積もりなん明るくなれる窓の白雪　……右、学びの窓のややあかみゆくさま、おかし。……右を勝となして侍り。　／　右　儒者　鳴り高き松の嵐はとどめてよ雪も柳絮と字つくとき　……右、夕霧の入学を思ひて、すべてをとめの巻の詞にて続けられし、おかしけれど、松の嵐、ことごとしき心地し侍れば、左勝つべくこそ。　／　左　儒者　興つきて帰れる儒者はよもあらじ雪に棹さす冬川の舟　左、王子猷が雪夜の舟、させる節も見へず。右、……勝とす。　／　右　弓とり　弓とりのつがひし矢より竹笠も被らでゐたき雪の曙　……右、弓射るは、端のいにて侍れば、被らでゐたきと続けられし仮字、いかがなり。これも左勝ちて侍り。　／　弓とり・同　下部等に劣りてさすが弓とりも手に覚えなきけふの雪打　茸板を燃やせば文の窓よりも雪にかどべの射前明るき　左、ゆゆしき弓とりも、郎等には劣りて、寒きに耐へざる趣意、事がらめづらしく、似る物なく覚へ侍り。
右、舎人なるかどべの府生が故事、おかしくは侍れど、文の窓、にはかなるやうにや。左勝ちて侍り。

【本文】

四十七番

左

月にたにくはむかく院のもんせむは
たちいる道のひとそまれなる

右

をしはかるこあてたになし夜引目の
いるかたくらき月のあたりは

四十七番　左ー〔明〕左　四十七番〔類〕七十一番歌合下　四十七番
くはむかく院ー〔類〕勧学院　もんせむはー〔白〕もんせむ
たちいる道ー〔類〕立入道　ひとそー〔白〕ひとて〔類〕人そ
まれなるー〔類〕稀なる
いるかたくらきー〔類〕いる方暗き

左、まことに文者の作とおほえて、詞やはらかす。とかと申かたし。文選を門前によせたるも、ついてに稽古のひとのまれなる述懐の心も、面白くきこゆ。

右も、詞こはし。けにもつよき弓とりのわさなり。されと、月の哥にいり方は心なきに似たり。以左為勝。

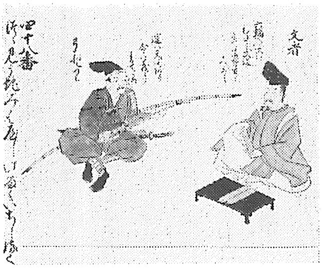
とくにつくさひはひなれはひんしけむ
うすきころもは人もかさねし

かりまたの二道かゝるものねたみ
矢さきはむねをとをすかひなし

左も右も、詞やはらかさるは、道にかなへり。哥のこゝろは、ともに恋の述懐也。よき持なるへし。

◇　◇

文者
六韜の末は、
むねと武道
にて候。御稽古も
候へかし。



詞やはらかすとかと申かたし―〔白〕詞やはらかすとと申かたし〔忠〕〔明〕詞やはらかなりと申かたし〔類〕ことはやはらかすとも申かたし
ひと―〔類〕人
面白くきこゆ―〔類〕おもしろく聞ゆ
いり方―〔忠〕〔明〕いる方〔類〕いるかた　心なき―〔白〕心なさ
さひはひ―〔忠〕〔明〕〔類〕さいはひ　ひんしけむ―〔類〕ひんしけん
うすきころも―〔類〕薄き衣
かりまた―〔類〕鴈股
矢さき―〔類〕矢先　むね―〔類〕胸
詞―〔類〕こと葉
哥―〔類〕歌　恋―〔類〕こひ　也―〔類〕なり
文者―〔忠〕四十七番文者
御稽古も候へかし―〔白〕〔忠〕御稽古候へかし

弓とり
運は天にあり。
命は義に
よりてかろし。

弓とり―〔類〕弓取

【語注】

◎文者は、文筆を業とする者。具体的には、漢詩文に通じ、公用文などを書く者。
弓取は、弓を手に取り持つ者の意で、すなわち、武士。

◎**月にたに** 下句の「まれなる」に係る。美しい月が照っていてさえ。

◎**くはむかく院** 勧学院。弘仁十二年(八二一)に創設された、藤原氏一門の子弟のための教育機関。平安京左京三条の北にあった。平安末には衰退の兆しを示し、弘安四年(一二八一)ころまでに退転した(国史大辞典「勧学院」の項)が、「勧学院の雀は蒙求を囀る」の諺は、『蒙求抄』序などにも見え、その存在は、後世もよく知られていたと思われる。また、中世以降、一部の大寺院に設けられた学僧養成機関も勧学院と呼ばれた。

◎**もんせむは** 白石本は「もんせむ」と「は」を脱するが、誤写であろう。「門前」に「文選」を掛ける。「文選」は、中国の周から梁に至る約千年間の文学作品を集めた選集。梁の昭明太子蕭統撰。白氏文集とともに、古くから日本に伝わり、日本文学に多大の影響を与えた。

◎**たちいる道のひとそまれなる** 「ひとそ」は、白石本は「ひとて」とするが、誤写であろう。「道の人」は、その道の専門家。(美しい月が照っていてさえ、勧学院に)立ち入る文者は稀だ、と嘆くのである。なお、「立ち入る」は、「立ち入らで雲間を分けし月影は待たぬけしきや空に見えけむ〈西行〉」(新古今集、廿、釈教歌)などの用例はあるが、ほとんど歌に用いない言葉。「道の人」も、歌に用いない言葉。「立ち入る」と「道」とは縁語。

◎**をしはかるこあてたになし** (月がどこにあるのか)推し量る手掛かりもない、というのであろう。「おしはか

る」は、「我が思ひ人の心をおしはかりなにとさまざま君なげくらむ〈維盛〉」（建礼門院右京大夫集）などの例がないではないが、和歌にはほとんど用いない言葉。「こあて」は、事を行うときの目当て、目印のことか。時代は下るが、『甲陽軍鑑』四十四に、「刀（の差し出しよう）は向の人左へ、膝を中に当て、太刀は、向の人、身体のまん中を当る也。心のこあて也」の例がある。それに、弓の縁語「小宛」を掛けるか。この意味の「小宛」については、『安斎随筆』二十三に、「こあてと申事は、弓引かぬ先によく矢先あてがひ候事なり」とする。「こあて」も、勿論、雅語ではない。

◎**夜引目**　「引目」は「蟇目」とも書く。鏃の代わりに大型の鏑をつけた矢。射たときに高い響きを発する。主として、笠懸や犬追物などの競技に用いた。「夜引目」は未考。『武器考証』十一、「職人尽歌合抜書」に、「夜引目ハ、トノヰ蟇目トテ、用心ノタメニ、夜中蟇目射ル也」とある。

◎**いるかたくらき月のあたりは**　「夜引目の射る」から「入る方」と続く。「入る方」は、（月の）入る方向。「辺り」に、弓の縁語「当たり」を掛ける。

◎**まことに文者の作とおほえて、詞やはらかす。とかと申かたし**　後半部は、白石本は「詞やはらかすとと申かたし」、忠寄本・明暦板本は「詞やはらかなりと申かたし」、類従本は「ことはやはらかすとも申かたし」。白石本・類従本は意味が通じない。また、ここは文脈上、肯定的に評価していることが明らかであるから、忠寄本・明暦板本も意味が通じがたい。これらは、おそらく「と〳〵」を「とも」と誤写したことに端を発する混乱であろう。「咎」は欠点。（「勧学院」、「門前＝文選」などという漢語を用いており）なるほど文者の作とみえて、言葉が和らいでいないが、（それこそが文者らしいところであって）この場合は欠点とは申しがたい、というのであろう。「詞和らがず」という用例は管見に入らないが、言葉が硬骨でこなれていないことを言うのであろう。恋の歌の判詞にも、「詞和らがざる」とある。

◎**文選を門前によせたる**　「寄す」は、歌論用語で、言葉と言葉を関連づけること。ここは、「文選」と「門前」とを掛詞にしたことをいう。

◎稽古のひとのまれなる述懐の心　「稽古」は、ここは、古い書物を読んで学習すること。「述懐」は、「じゅっくゎい」または「しゅっくゎい」と読む。和歌で、身の不遇や老いの嘆きなど、作者の私情を詠むこと。また、その歌。述懐歌は、歌合など、晴の歌を詠むべき場では、古くは歓迎されなかったが、「堀河百首」や「西宮歌合」で歌題として取り上げられて以降、歌合題としても定着した（『和歌大辞典』「述懐」、有吉保『和歌文学辞典』「述懐」の各項）。「心」は歌論用語で、歌に詠まれた内容。

◎面白くきこゆ　「おもしろし」は歌論用語。

◎詞こはし　「こはし」は、歌論用語で、表現が粗野で優美さに欠けること。「おしはかる」、「こあて」、「夜引目」、それに、「辺り＝当たり」という掛詞などに関して言うのであろう。

◎けにもつよき弓とりのわさなり　文者の場合と同様、本来なら難じられるべき「詞こはし」という欠点が、強き武士の歌としては長所となっている、と戯れるのである。

◎月の哥にいり方は心なきに似たり　「いり方」は、忠寄本、明暦板本は「いる方」、類従本は「いるかた」。歌に「入る方」とあるのに合わせたのであろうが、東博本、尊経閣本、白石本の「いり方」で、十分意味は通じる。「心なき」は、白石本は「心なさ」とあるが、誤写であろう。「入り方」は、（月が）入ろうとするころ。歌合の月の歌に入り方の月を詠むのは、題意に対する理解を欠いている、というのである。（一番語注「哥合にはかたふく月あやなくきこゆ」、九番語注「哥合にいりかたとよめる、いさゝか心なきに似たれども」の各項参照）

◎とくにつくさひはひ　「徳（または、得）につく幸ひ」で、幸福が幸福を呼ぶ意の諺か。未考。

◎ひんしけむ　閔子騫（びんしけん）。孔子の弟子。『蒙求』閔損衣単などによれば、幼少の時、継母が、実子二人には綿入れの着物を着せ、子騫には芦花の絮（芦の花を綿の代用としたもの）の着物を着せたので、父がこれを知って離縁しようとしたが、「母在れば一子寒（こご）え、母去れば三子単（ひとへ）ならん」ととどめたため、継母も改心した、という。なお、『究百集』君臣父子道に、「薄き衣をいとはぬは、この閔子騫が言の葉」という詞章がある。序詞的に、下句の「薄き衣」に続く。

◎**うすきころもは人もかさねし**　「衣を重ね」に、衣服を重ね着する意と、男女が共寝する意とを掛ける。和歌では、「たなばたは雲の衣をひき重ねかへさで寝るやこよひなるらん〈頼宗〉」（後拾遺集、四、秋上）などの例がある。（閔子騫の着ていたような）薄い粗末な衣はだれも重ね着することはあるまい。そのように、あの人は貧しい私と共寝してくまい。

◎**かりまたの二道かゝるものねたみ**　「かゝる」は、諸本、「かくる」と読めなくもない。和歌にも、「片糸の一筋にのみ答ふれば二道かけてとふかひもなし〈伊衡〉」（躬恒集）などの例があり、「かくる」の方が自然かと思われるが、しばらく「かゝる」と読んでおく。「雁股」は、先が二股に分かれ、その内側に刃のついた鏃。また、その鏃をつけた矢。主として狩猟に用い、射貫いたり射切ったりする効果があった。その雁股のように、の意で、「二道かかる」に続く。「二道かかる」は、相手が二道にかかる恋をしている、すなわち、自分の他に別の相手にも思いを寄せていることをいうのであろう。「物妬み」は、和歌の用例を見ない。

◎**矢さきはむねをとをすかひなし**　雁股の矢先が胸を貫き通しても、そのかいがない。「胸を通す」は、相手の心を射止める意か。または、自分の思いを貫く意か。いずれにしても、用例は管見に入らない。比喩としては前者が自然であるように思われるが、「かひなし」に続くことからすれば、後者の方が意味が通じやすい。『新大系』は、「矢先」を嫉妬の矢先と解する。

◎**左も右も、詞やはらかさるは、道にかなへり**　「詞やはらがざる」は、左歌の「とく」、「閔子騫」、右歌の「雁股」、「矢先」、「胸を通す」などの言葉についていうのであろう。「道」は、文者・弓取それぞれの専門の道（序語注「よろつの道をたてたり」の項参照）。月の歌同様、言葉が硬骨な点がかえってよい、と戯れるのである。

◎**恋の述懐**　恋の歌で、かつ述懐歌めいた内容、というほどの意であろう。左歌については、「薄き衣」などと身の不遇を嘆いている点について言うのであろうが、右歌については、具体的にどの点を指して言うのか、未考。

◎**六韜の末は、むねと武道にて候**　文者が弓取に話しかけている言葉。「六韜」は、中国、周の呂望の撰とされる（実は、後世の偽作という）兵法書（『中国学芸大事典』「六韜三略」の項）。「末」は、究極の教えというほどの意

か。未考。『六韜』の教えは武道に尽きる、というのか。

◎**御稽古も候へかし**　「御稽古も」は、白石本・忠寄本は「御稽古」と、「も」を脱する。意味に大差はないが、誤写であろう。「稽古」は、ここは、武芸の練習。

◎**運は天にあり**　運は天命によるもので、人の力で左右することはできない、という意味の諺。『太平記』二十九、「将軍上洛事付阿保秋山河原軍事」に、「運ハ天ニアリ、一足モ引事有ベカラズ」、また、同三十、「高倉殿京都退去事付殷紂王事」に、「運ハ天ニアリ、何ノ用心カスベキ」とある。元亀二年京大本『運歩色葉集』に、「運ハ在レリ天ニ」、『西鶴織留』六・一に、「一切の人間、運は天に有」とあるなど、後世の用例も多い。

◎**命は義によりてかろし**　「命」は「めい」と読む。（ただし、明暦板本は「命（いのち）」とする。）『後漢書』朱穆伝の「情為レ恩使、命縁レ義軽」から出た諺。かけがえのない命も、義と較べれば軽いものである、の意。幸若舞曲「ほり川」に、「命（めい）は義によつてかろし、命は恩の為に奉る」、同「屋嶋軍」に、「めいは儀に依てかろし、命は恩の為につかはす」とある。

【絵】

文者は、立烏帽子、狩衣、袴姿で、文机の前に坐し、巻物を持つ。文机の上に、巻物二軸。白石本・忠寄本は、文机の上に、巻物の他、冊子本二冊。

弓取は小具足姿。梨子打烏帽子に鉢巻、鎧直垂に弓籠手（ゆごて）（弓を射るとき、左袖が弦に当たるのを防ぐために、左の肩から手にかけて着ける筒状の籠手）。籠手、脛当をし、貫（つらぬき）（皮製の浅沓）を履く。手に雁股の矢。後ろに、弓と太刀。

【参考】

○　身を惜しまぬもただ人のため

国安くなるはいくさの力にて　〈専順〉　（新撰菟玖波集）

○　捨つるは身をや捨てぬなるらん
武士はその名にかふる命にて　〈増運〉　（同）

○　はかなき物はもののふの道
たがための名なれば身より惜しむらん　〈宗祇〉　（同）

○　身を捨つる心は安くなき物を
家を思へば勇むもののふ　〈心敬〉　（同）

○　あはれにも猶すすむこそ涙なれ
子に争ふはもののふの道　〈種久〉　（同）

○　心にかけしほどな忘れそ
もののふは矢先に名をもあげつべし　〈宗元〉　（同）

○　むねなる月に光添へばや
勢ひを身は引き取らぬ梓弓　〈宗砌〉　（同）

○　思ふ願ひのはやきみたらし
放つ箭の至るところは心にて　〈宗砌〉　（同）

○　心引く我が古琴を手に抓きて
弓と筆とはとりどりの家　〈堀河〉　（初瀬千句、四）

○　乱れ無き世に高麗人も仕へきて
文のはかせの道ぞ正しき　〈瑠璃満〉　（文安月千句、一）

○　其の道と弓持ち矢負ふ人や誰
舎人の長はつがひてぞ行く　〈聖阿〉　（同、六）

○　力もさぞな弓の勢ひ
武士に従ふつかさ進めただ　〈忍誓〉　（享徳千句、五）

○　ひききらぬ心から世にむすぼほれ
弓取りのみか又太刀を持つ　（異体千句、九）

○　つらさをも知らせず上は難面くて
友をはかるはもののふの道　〈宗祇〉　（美濃千句、二）

○　濁る流れに魚ぞ隠るる
学び来る道や浅きに絶えぬらん　〈宗祇〉　（同）

○　武士の君に知られず仕へきて
つゐにその名のむもれはてめや　〈宗春〉　（因幡千句、五）

○　身を立つる道は学びを本として
弓を夜る昼たのむ武士　〈清玉〉　（表佐千句、三）

○　たれかたらはむ身を捨つる道
武士は進む心を争ひて　〈紹永〉　（同、四）

○　折をも知らぬわび人の庵
古残る学びの窓にうつろひて　〈甚昭〉　（同、八）

○　露のまもおろかならじと読む書に
うつしがたきはいにしへの道　〈清玉〉　（同、九）

○　馬の上にも取れるさかづき
武士の祝ふ軍の門出して　〈修茂〉　（河越千句、六）

○　宿直人声をぞかはす夕ま暮

木の丸殿に名のる武士　〈長敏〉　（同、七）
○友にも隠すそのはかりごと
もののふの荒きは情け少なくて　（三嶋千句、一）
○仕ふる道よなを正しかれ　（同、二）
あづさ弓伝はる家の高き名に
○争ふ道をたつる小車　（同、四）
物のふはいくさの端を心にて
○人の力の教へ頼もし
引けやただ代をおさむべき梓弓　〈宗般〉　（葉守千句、二）
○かしこき道の人の恋しさ
文もただ読める斗はなにならで　〈肖柏〉　（同、十）
○国々をなびかすはみなはかり事
弓を袋の武士の家　〈宗長〉　（同、十）
○数々に思ひをきけむ文の道
たえずは千代のその家の風　〈雪〉　（東山千句、一）
○弓に力を合わせぬやなき
何かこのいくさの場の勝たざらん　〈玄清〉　（同、五）
○伝へぬ道も心にや得む
かしこきはむまれながらの人もなし　〈雅教〉　（同、七）
○穴の中より草ぞ生ひたる
もののふの野に射捨てたるわれ引目　（竹馬狂吟集）

○　恋は弓折れ矢こそ尽きぬれ
八幡ぞ思ふといふにつれなくて　（犬筑波集）

○　遁世したる武士の果て
安売り茶立つる茶道にやとはれて　（同）

○　弓押し張りて射るとこそ見れ
ゆがうだる鐺の柄かすむ楯のうら　（誹諧連歌抄）

○　あつきたなしと太刀をこそ抜け
武士の東司の尻に逃げ入りて　（同）

○　握りて物を思ひこそすれ
武士のかたき待つ夜の太刀の束　（同）

○君臣二つは二体の義、君を重んじ親子（しんし）の孝行、賢人無双の弓取に、却つてとかくの仰せはいかに。あら腹立ちや無念やな。　（謡曲「錦戸」）

○それ弓取の子は胎内にてねぎことを聞き、七歳にて親の敵を討つとこそ見えたれ。　（謡曲「鳥追舟」）

○判官これを聞こし召し、いやとよ弓を惜しむにあらず。義経源平に、弓矢を取つて私なし。然れども、佳名は未だ半ばならず。さればこの弓を、敵に取られ義経は、小兵なりといはれんは、無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極めと思ふべし、さらずは敵に渡さじとて波に引かるる弓取の、名は末代にあらずやと、語り給へば兼房さてその外の、人までも皆感涙を流しけり。　（謡曲「八島」）

○それ（斎藤別当実盛）は平家の侍弓取つての名将、そのいくさ物語は無益、唯おことの名を名のり候へ。　（謡曲「実盛」）

○今まで頼まれ申す主君に心を引きかへて、親の遺言背かんこと、弓矢取つての恥辱なるべし。　（謡曲「錦戸」）

○なうお主（しう）の命に代ること、弓矢取る身の習ひなり。　（謡曲「仲光」）

○継信その時に、息の下より申すやう、弓矢取る身の、御身代りに立つ事二世の願ひや三世の御恩を少し報謝する。命の軽き身は、露塵何か惜しからん。（謡曲「摂待」）

○御意をばいかで背くべき。しかも一人選まれ申し、防ぎ矢仕れとの御諚、弓矢取っての面目なれば、忝うこそ候へとよ。（謡曲「忠信」）

○板東殿原は弓は上手なるもの、空立つ鳥を射て落といたり、さても上手や空舞（も）ふ鶴を落といた、若い殿御が翔け鳥射たる弓手は、さても射たのふ見事や弓の姿は（田植草紙）

○弓と矢とがな板東方へ、宮仕いをせう板東方へ、武士の奉公好むと人や思ふろう、武家奉公なんぼう見てはよいもの、殿に参らせう塗籠籐の弓おば（同）

○重籐巻いたる弓のふりをしてな、板東殿原の肩にかからばやな、弓のふりして板東殿御にほれたよ、なにと言ふても思ふによらぬ我が身や、いつくしいは板東殿御の姿よ（同）

○ヨーロッパの人びとは刺突武器に慣れている。日本人はそれらを全然使わない。（日本覚書、七）

○われらにおいては、矢を射るときに射手は服を着ている。日本では、弓を射る者は、一方の腕を露わにするため、半ば着物（キモン）を脱がねばならない。（同）

○われらにおいては、弓を射る際に口で叫び声を発したりはしない。日本人は矢を放つときに大きく一声叫ばねばならない。（同）

○われらにおいては、武具をつけるときに、下に厚い布のものを着けなければならない。日本人は、武具をつけるときは、母親が生んだときそのままの素っ裸となる。（同）

○われらにおいては、完全に武具をつけないでは戦場に赴く姿とは見られない。日本では、武装して出陣したといってもらうには、首に飾り襟（コラリーニョ）をつけるだけで事足りる。（同）

○われらにおいては、戦争の際、横笛、太鼓、またはトランペットを奏する。日本人には、きわめて不快な響きをもつ、しわがれ音の法螺貝（ブジオ）しかない。（同）

○われらにおいては、四角の軍旗を手にして運ぶ。日本人は各々が自分の旗を、非常に長い竹につけ、背に差し込んで運ぶ。（同）

○われらにおいては、曹長、小隊長、十人組長、百人隊長など（階級が軍隊に）ある。日本人はそのことすべて気にしない。（同）

○われらにおいては、馬（上）で戦う。日本人は戦わねばならぬときには馬から下りる。（同）

○われらの国王や隊長は、兵士に報酬を支払う。日本では、（兵士の）各々は、従軍しているあいだじゅう、食べたり、飲んだり、着たりすることを自弁でやりくりせねばならない。（同）

○われらにおいては、土地や都市や村落、およびその富を奪うために戦いがおこなわれる。日本での戦さはほとんどいつも小麦や米や大麦を奪うためのものである。（同）

○われらにおいては、馬、ひとこぶ駱駝、駱駝などが、兵士たちの衣類を運ぶ。日本では、それぞれ一名の（主君）に従う百姓（ヒャクショ）たちが、彼のため衣類や兵糧を背負うて運ぶ。（同）

○われらにおいては、自殺はきわめて重罪とみなされる。日本人は戦いにおいて、もはや力つきたとき、切腹すること、それが大いなる勇気なのである。（同）

○われらにおいては、裏切りは稀だし、（それをすれば）大いに非難される。日本では、いともありふれたことで、ほとんどまったく非難されぬほどである。（同）

○われらにおいては、死刑執行人になるなど最大の醜行である。日本では、正道（ジュスティサ）によって人を殺すことは、いかなる武士（フィダルゴ）もすることだし、それをまた自慢にする。（同）

○われらにおいては、兵士たちは左腕で火縄を持ち運ぶ。日本人は右手で持ち運ぶ。（同）

○われらにおいては、言葉を発しないで撃剣仕合いをする。日本人は（縦に）斬りつけたり横に斬りつけたりするたびに一声叫ばねばならない。（同）

○われら（ヨーロッパの）スイスの兵士たちは、鉄砲を肩にあてて発射する。日本人は、敵に対して照準をする人

のごとく、これを顔にあてる。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（同）

〇彼らは誇りが高く面目を重んずるので、名誉に関することでは簡単に生命をすてることもいとわない。同様に、自分の保護と援助の下に身をおいている者のためには、無造作に、わが生命を賭ける。彼らは侮辱や悪口を我慢しないし、また人の面前でそれをいい出すこともしない。彼らはその点できわめて辛抱強く感情を外に表わさないからである（死ぬ覚悟でいる場合は別である）。従っていさかいは稀である。というのは、いさかいをする者は死を決意するからであるが、それは彼らの武器［刀剣］はそういうことに適していて、死者を出さないいさかいは稀にしか起こらないからである。そして、一方が他方を殺す場合に、仕掛けたものであろうと、強要されたものであろうと、道理があろうとなかろうと、逃げ出すことはほとんどない。その結果、かかることが彼らの上に起これば、他人から殺されるのは不名誉と考えて、彼らはそれ以前に自分で腹を切る。自分で生命を絶つことは名誉であり、勇気あることとして他人から褒められると考えている。自分で自らの生命を絶つという行為には、重大な儀式と厳粛さが伴い、どのように切腹するか見守っている大勢の人々の見せ物となる。この気概と誇りから、意志の弱さや卑怯さを見せまいとする気持がその人の心の中に生じ、裁きによってどのような種類の死を課せられようとも、死刑に処せられる場合には、女でさえ、むしろたいへんな勇気を示す。そしてその場に居合わす人々と数々の挨拶を交わし、彼らは死に臨んで決然とした態度を示して冷静な気持をあらわすのである。（日本教会史、一巻、十章）

四十八番　白拍子　曲舞舞

【職人尽】

【鶴岡放生会職人歌合】四番右　白拍子

炑の思一こゝゑにてもかそへはや月見ることのつもる夜比を
思わひ心をせめてふまれけりつらし〳〵といひかさねつゝ

判云、月は、左哥(ママ)、三秋のあわれにたへす、一声の心さしをいうに侍れと、左哥、……勝と申侍ぬる。恋は、……右の哥、ことのさま、哥のすかた、言猶感動、頗可為勝者歟。

【後撰夷曲集】白拍子　煩悩も菩提と聞きていにしへの白拍子さへ仏とやいふ〈喜雲〉**【誹諧職人尽】**白拍子　柳には鼓も打たず唄もなし〈其角〉　宿下りの爰も露けし妓王村〈午寂〉　大象の傾城あゆみ暑さ哉〈六椀　青峨〉　古代付合の句に　広き世に名を取れる遊君　嵯峨の西とぢこもりたる生仏〈立甫〉　同　舞姫の裾からそつと手を入れて　静は泣く泣く出づる雪隠〈堺　元順〉　入相に要もゆるむ五月雨〈渓淵〉　仏出て扇露けし嵯峨の庵〈也足亭　登度〉　夕顔や隣を聞けば白拍子〈祇山〉　白拍子また裾軽し十三夜〈逸秋〉　蝶々も狂ひ仲間やしら拍子〈川越　連国〉　白拍子白衣になりて涼むかな〈仝〉　花鳥に我が身の上や白びやうし〈佳節〉　太刀帯びて媚を売りけん月の眉〈桃渓改　桃兒〉　しらびやうし隙な手もあり小夜砧〈嘉橋〉　題歌妓　狂詩一律　吉野丸花躍　歌鶯姿似燕　橘町振袖香　遊女意如娘　流液平相国　誰知明日景　抜腰源九郎　還勝昨宵涼〈北陞斉　水和〉　秋淋し仏の景の草枕〈仝〉　檜扇子を柱に干すや五月雨〈水楼〉　長刀も持たせて見たき扇かな〈如尺〉　白拍子言葉に花の女かな〈列張〉　名月もいさよひもしらしら拍子〈寥和〉　追加袖の香の流れて水木春深し〈白杪〉　舞の手の波間を潜る衛哉〈友以〉　茸狩りやまた覗かるる祇王庵〈東風〉　／　曲舞

舞　一夜来て三井寺うたへ初しぐれ〈夜白〉　曲のうちは弁慶いかに合歓の花〈水馬〉　御命講の日暮れや尼の居曲舞〈寥和〉　【職人尽狂歌合】左　寄白拍子恋　口説くとも落ちぬは情けしら拍子あが仏よと朝暮拝して　左右、おかしく言ひおほせられたり。持にて侍るべし。　／　右　寄白拍子恋　ささがにのいその禅師が伝へかや来べき夜さとすふるまひの手も……右、ささがにのい、と続けられし、なべての口つきならず。此のつがひ、左右ひとしくや。　／　左　寄しら拍子恋　あだ波のよ所にや立つと白拍子浅妻舟の梶をとる身は　左、心聞こえたり。右、……勝にて侍りなん。　／　左　寄くせまひ舞恋　かくばかり忍ぶは恋のくせ舞の二人静にあふよしもがな　……恋のくせまひ、人がらいささかすぐれて見へ侍り。　／　左　寄くせ舞まひ恋　いかにせむ恋に泪のくせ舞のつい一くさり濡らす袂は　左、下の句、ことに味はひあり。……勝負わきがたし。

【本文】

四十八番

つゝみうちみはやしけるもいちしるく
月にかなつるしらひやうしかな

くせまゐの月にはつらきをくらやま
その名かくれぬ秋のも中を

左、させるふしなさ哥なるをや。右は、当世くせ舞に、月にはつらき小倉山、その名はかくれさりけり、といふ音頭を思よせたるにや。道によりてかしこけれは、為勝。

わすれゆく人もむかしのおとこ舞
くるしかりける恋のせめかな

つゝみ―〔類〕鼓
しらひやうしかな―〔類〕白拍子哉
くせまゐ―〔忠〕〔明〕くせまひ〔類〕くせ舞　をくらやま―〔類〕小倉山
も中―〔類〕もなか
なさ―〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕なき
くせ舞―〔類〕曲舞　その名は―〔白〕その名
わすれゆく―〔類〕忘れ行　むかし―〔白〕むし

車にてそてうちふりしまゐ女
かゝるこひすとひとはしりきや

左、昔の男舞、恋のせめなと、哥めきたるに、腰の句つゝかす聞ゆ。右は、袖うちふりしといひて、しりきやといひとちめたるは、彼光源氏の哥を思へる歟。やさしく侍を、おのか名をあらはして、かゝるといへるや、あまりならむ。すこし左可勝や。

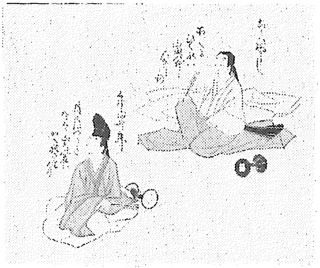
◇　◇

しらひやうし

所〳〵に
ひく水は、
山田の井と
のなはしろ

くせまゐ舞

月にはつらき
をくら山、その名は
かくれさりけり



そてうちふりし―〔類〕袖打ふりし　まゐ女―〔忠〕〔明〕〔類〕まひ女
こひす―〔類〕恋す　ひと―〔類〕人
せめ―〔類〕責　哥めきたるに―〔白〕哥めきたる〔類〕歌めきたるに
聞ゆ―〔類〕きこゆ　うちふりし―〔類〕うち振し
哥―〔類〕歌　侍を―〔類〕侍るを　おのか―〔明〕をのか〔類〕ゝのか
あらはして―〔類〕顕はして　ならむ―〔類〕ならん　すこし―〔類〕少

しらひやうし―〔白〕〔類〕白拍子〔忠〕四十八番白拍子（しらひやうし）
所〳〵―〔白〕所ゝ〔忠〕処ゝ
水―〔白〕〔忠〕礼
なはしろ―〔白〕〔忠〕なわしろ
くせまゐ舞―〔白〕〔忠〕〔類〕曲舞ゝ〔明〕くせまひ舞
をくら山―〔白〕〔忠〕小倉山　その―〔白〕〔忠〕其

【語注】

◎白拍子は、鼓などの伴奏で今様などを歌い、舞を舞う芸能。また、それを行う遊女。もと仏家の声明から出た芸能であるが、平安末ごろ、水干に袴姿の、男装の白拍子が出て、急速に盛んになった。（本職人歌合の絵は、小袖、袴姿。）平清盛や源義経、後鳥羽院など、貴顕の遊宴に侍ることも多かった（後藤紀彦「遊女と朝廷・貴族 中世前期の遊女たち」〈週刊朝日百科 日本の歴史 中世Ⅰ－③〉）。室町時代の白拍子の実態については不明。

曲舞は、室町時代初期ごろ起こり、中期ごろまで流行した舞。白拍子舞から派生し、鼓の伴奏で、叙事的な内容の歌につれて、簡単な舞を舞ったという。白拍子舞よりも当世風な舞であったらしい。観阿弥がこれを取り入れて、猿楽のクセを成立させた。女が立烏帽子に水干、大口の男姿で演じる女曲舞が、ことに喜ばれた。本職人歌合も、女曲舞である。（ただし、立烏帽子に薄物の直垂、袴姿。）

◎**つゝみうち** 白拍子が鼓の伴奏で舞を舞ったことについては、『平家物語』一、「祇王」に、白拍子、仏の今様を聞いた清盛が、「このぢやうでは舞もさだめてよかるらむ。一番見ばや。つゞみうちめせ、とてめされ」（日本古典文学大系）たとあり、また、『義経記』六、「静若宮八幡宮へ参詣の事」に、頼朝に舞を強要された白拍子、静が、「このたびは御不審の身にて召し下され候ひしかば、つゞみうちなどをも連れても下り候はず。……われ〳〵は都へ上り、又こそつゞみうち用意して、わざと下りて法楽に舞ひ候はめ」と辞退しようとしたが、頼朝は、工藤祐経に鼓を打たせ、畠山重忠に笛を吹かせるなどして、舞を舞わせた、という話が見える。なお、祐経に鼓を打たせるなどしたことは、幸若舞曲「静」にも見える。ここの「鼓打ち」は、名詞と取れなくもないが、鼓を打って、と取る方が自然であろう。

◎**みはやしける** 「見はやし」に、白拍子の縁語「囃し」を掛ける。「見はやす」は、見てもてはやすこと。ここは、素直に読めば、白拍子の舞を見はやす、と取れるが、月を見はやす心も含ませているのであろう。いずれにしても、和歌には、「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ〈読人不知〉」（古今集、一、春歌上）などの例があるが、そうしばしば用いられる言葉ではない。「囃し」を掛けるためにあえて用いたのであろう。「囃す」

は、『義経記』、前項引用直前に、「都にて内侍所に召されし時は、内蔵頭信光に囃されて舞ひたりしぞかし。神泉苑の池の雨乞ひの時は、四条のきすはらに囃されてこそ舞ひて候ひしか」という静の言葉があり、また、幸若舞曲「静」にも、「ないし所へめされ、駿河のまひをまひけるに、月卿雲客ひやうしをとつて、はやされたり」などとある。

◎**いちしるく**　「いちじるし」は「いちしるし」の新形であるが、室町時代では、「いちしるし」を標準語とする意識が働いていたと考えられる（『時代別国語大辞典　室町時代編』「いちしるし」の項）。ここも、清音で読むべきであろう。なお、ここの例はク活用であるが、室町時代には、ク活用から派生したシク活用の例は少なく、本来のク活用が標準語の地位にあった（同前）。ことに、和歌では、シク活用と断定できる用例は管見に入らない。白拍子の舞が優れている意に、月が明るく際立っている心を含ませるのであろう。

◎**月にかなつる**　「かなづ」は、舞を舞うこと。「月にかなづ」は、月の下で舞を舞うことをいうのであろうが、伝統的な和歌の用例は管見に入らない。（そもそも、「かなづ」という言葉自体、和歌にはほとんど用いられない。）ここは、白拍子の歌う今様などの歌詞に基づくか。未考。

◎**くせまゐの**　曲舞の詞章にあるように、の意か。

◎**月にはつらきをくらやまその名かくれぬ秋のも中を**　判詞に指摘し、また、画中の言葉にもあるように、当時はやっていた曲舞の詞章に基づく表現であろうが、この点、未考。「小倉山」は、京都西郊（現京都市右京区）の山。大堰川を挟んで嵐山と対する。紅葉の名所。歌枕。「百人一首」ゆかりの小倉山荘のあったことでも著名。和歌では、「いづくにか今夜の月の曇るべき小倉の山も名をや変ふらん〈道済〉」（新古今集、四、秋歌上）のように、「小暗」に掛けて詠まれることが多い。ここも、「小暗」を掛ける。「その名隠れぬ」は、小倉山が有名だということであるが、同時に、下の「秋の最中」に係る。「秋の最中」は陰暦八月十五夜。「水のおもに照る月なみを数ふればこよひぞ秋の最中なりける〈順〉」（和漢朗詠集、上、秋、八月十五夜付月）が著名。月にとっては心ない「をぐら」山である。今宵はそのように名高い十五夜であるというのに。

◎させるふしなさ哥なるをや　「なさ」は「なき」の誤写であろう。底本以外の諸本は、すべて「なき」。「節」は歌論用語で、歌の着想・趣向、場面構成のこと。歌合においては、「珍しき節」の詠出が評価された（有吉保『和歌文学辞典』「節」の項）。ここは、特別な趣向もない、つまらない歌だ、というのである。「節」、「哥」に、白拍子の歌う今様などの「節」、「歌」の意を掛け、戯れるか。

◎当世くせ舞に、月にはつらき小倉山、その名はかくれさりけり、といふ音頭　「その名は」は、白石本は「その名」と、「は」を脱するが、誤写であろう。「音頭」は、「おんどう」、または転じて「おんど」と読む。合唱や合奏のとき、調子を整えるため、最初の一節を一人が歌ったり演奏したりすることをいうが、曲舞にも音頭があったか。

◎思よせたるにや　「思ひ寄す」は、あることを思いついて、題意に関連づけた表現をすること。

◎道によりてかしこければ　「道によりて賢し」は、それぞれの分野については、その道の専門家には及ばない、の意の諺。『鴉鷺物語』上に、「性は道によりて賢しと申せば、武勇の不思議は、諸道にかはりて、大方にすすどげなるにも、又、我々が様（やう）の無分暁（むふんけう）なる形（なり）にもよらぬ事とうけ給り候ふ」とある。後世の『毛吹草』二、世話付古語には、「碁せいゆみぢから」と並べて、「せいはみちによりてかしこし」を挙げる。『せわ焼草』二、曳言之話にも、「せいは道によつてかしこし」とあり、『譬喩尽』には、「性は道に依つて賢し　異ニ、生ハ依レテ道ニ賢シト云云。生ハ生産トテ所ノ銘物、或ハ産業トテ家業家産也。職工ナリ」とある。また、これも後世の例だが、『頼豪阿闍梨恠鼠伝』八套には、「げに業は道によつて賢し。もし西行にあらずば、よく景能を知りがたかりぬべし」とある。ここは、曲舞の世界についていう（序語注「よろつの道をたてたり」の項参照）。さすが曲舞舞だけあって、曲舞の詞章をうまく詠みこんだ、と褒めるのである。

◎わすれゆく人もむかしのおとこ舞　「むかし」は、白石本は「むし」とあるが、誤写であろう。「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時も有りこしものを〈読人不知〉」（古今集、十七、雑歌上）をふまえるか。「忘れ行く人」は、私のことを忘れて行く人。「思ひやるかたなきままに忘れ行く人の心ぞうらやまれける〈中原頼成妻〉」（後拾遺集、十四、恋四）、「忘れ行く人ゆゑ空をながむればたえだえにこそ雲も見えけれ〈範兼〉」（新古今集、十四、恋歌四）

などの例がある。私を忘れて行くあの人も昔の男（かつての恋人）であった。「昔の男」から「男舞」と続く。「男舞」は、古く白拍子の舞のこと。男装をして舞ったことからいう。『徒然草』二百二十五段に、「多久助が申けるは、通憲入道、舞の手の中に興ある事どもをえらびて、いその禅師といひける女に教てまはせけり。白き水干に鞘巻を差させ、烏帽子をひき入たりければ、をとこまひとぞいひける。禅師がむすめ、しづかと云ける、この芸をつげり。これ白拍子の根元なり」とあり、また、『平家物語』一、祇王に、「抑、我朝にしら拍子のはじまりける事は、むかし鳥羽院の御宇に、しまのせんざい、わかのまひとて、これら二人がまひいだしたりけるなり。はじめはすいかんにたて烏帽子、白ざやまきをさいてまひければ、おとこまひとぞ申ける」（日本古典文学大系）とある。その「男舞」のように、の意で、下句に続く。

◎**くるしかりける恋のせめかな**　「恋の責め（名詞）」という言葉は管見に入らないが、「枕よりあとより恋の責めくればせむ方なみぞ床中にをる〈読人不知〉」（古今集、十九、誹諧歌）は著名。恋の思いに責められる苦しさ。「責め」に、白拍子などで、曲の終わりのテンポの速い部分、また、その調子をいう「責め」を掛ける。『義経記』六、「静若宮八幡宮へ参詣の事」に、「しんむしやうの曲半らばかり数へたりける所に、祐経こゝろなしとや思ひけん、水干の袖を外して、せめをぞ打ちたりける。静、君が代の、と上げたりければ、人々これを聞て、情けなき祐経かな、今一折舞はせよかし、とぞ申ける」とある。（男舞の責めのように）苦しい恋の責めを受ける、というのである。なお、『鶴岡放生会職人歌合』四番右、白拍子の恋の歌にも、「思ひわび心をせめてふまれけり」と、同様の掛詞がある。

◎**車にて……**　判詞にも言うごとく、『源氏物語』紅葉賀で、源氏が紅葉賀の試楽で青海波を舞った翌朝、藤壺に贈った歌、「物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや」を本歌とする。

◎**車にてそてうちふりしまゐ女**　「車」は山車。「舞女」は、作者である曲舞舞の女。『師守記』に、「今日祇園御輿迎如例、鉾以下冷然、久世舞車有之云々」（貞治三年六月七日条）、「今日祇園御霊会如例、鉾以下冷然、無作山等、於定鉾者如近年歟、久世舞車有之云々」（同十四日条）などとあり、『五音』下に、「今ハ、皆々、曲舞ノ舞手

絶エテ、女曲舞ノ加賀ガ末流ナラデハ不レ残。祇園ノ会ノ車ノ上ノ曲舞、コノ家ナリ」とあり、また、『尺素往来』上に、「祇園ノ御霊ノ会、今年殊ニ結構。山崎之定鉾、大宿直之笠鷺鉾、……癖(くせ)舞、……」とあるように、当時、祇園会に曲舞の山車が出ていた。（謡曲「舞車」によれば、遠江国見付の祇園会にも曲舞の山車が出たという。）ここは、そのことを言うのであろう。舞の袖を振るのを、恋人への合図と見立てるのである。

◎**かゝるこひすと**　「かかる恋」は、「わがためにかつはつらしと見山木のこりともこりぬかかる恋せじ〈読人不知〉」（後撰集、十四、恋六）、「黒髪に白髪まじり生ふるまでかかる恋にはいまだあはざるに〈坂上郎女〉」（拾遺集、十五、恋五）などの例がある。このような（苦しい）恋。その意味の「かかる」に、歌や舞が拍子に乗る意の「かかる」を掛ける。猿楽に取り入れられた曲舞について、『曲付次第』に、「是は、世の常の音曲には変りたる曲流なり。先、拍子を体にして、拍子にかかりて、軽々と行くべし」とあり、本来の曲舞も、「かかる」ことを特徴とする、軽快な歌舞であったと思われる。

◎**哥めきたるに**　白石本は「哥めきたる」と、「に」を脱するが、誤写であろう。「歌めく」は、歌論用語で、「ひばりの意趣にはかなひ、すがたも歌めきては侍るを」（六百番歌合、春中、十八番判詞）、「すがた歌めきたるにつきて、右勝べきにこそ」（同、恋九、二十八番判詞）、「いますこし歌めきてきこえ侍るに」（千五百番歌合、千二百九十九番判詞）など、歌合判詞にしばしば用いられる。いかにも歌らしいと思われる表現をしているという意味（『和歌大辞典』「歌めく」の項）。歌の「姿」について言われることが多い。

◎**腰の句つゝかす聞ゆ**　「腰の句」は、歌の第三句。第三句の「男舞」が、第五句の「責め」に続き、直接、第四句の「苦しかりける」に続かないことをいうか。

◎**いひとぢめたる**　「言ひ閉ぢむ」は、強い調子で言い切ることであろう。歌合判詞に、多くはないが、「葦の葉も霜枯れにけり難波がた玉藻刈り舟行き通ふみゆ……をはりの句のいひとぢめたるほど、にほひすくなきやうに侍れど……」（広田社歌合、海上眺望十三番）、「秋風の吹きそめしよりなれにける袂の露はこよひばかりや……こよひばかりやも、いひとぢめぬ心ちし侍れど、……」（千五百番歌合、八百十六番）などの例がある。

◎**やさしく侍を**　「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう（和歌大辞典「やさし」の項）。

◎**おのか名をあらはして、かゝるといへるや、あまりならむ**　「舞女」と、歌の作者をあらわにして、なお、「かかる」という曲舞の縁語を用いた点が、あまりに露骨だというのであろう。

◎**所〲にひく水は、山田の井とのなはしろ**　「水」は、白石本、忠寄本は「礼」とあるが、誤写であろう。今様などの詞章であろうが、未考。所々の田に引く水は山田の井戸から取る水で、その水を張った苗代、の意か。

◎**月にはつらきをくら山、その名はかくれさりけり**　当時はやっていた曲舞の詞章であろうが、未考。

【絵】

白拍子は垂髪で、小袖に緋の長袴を履き、右手に扇を持つ。横に鼓。反対側に、脱ぎ捨てた打掛。

曲舞舞は、垂髪に立烏帽子を被り、薄物の直垂を着て白袴を履き、右手に扇を持つ。横に鼓。類従本は、直垂の紐を描き落とす。

【参考】

○　曲舞はてて、各々別れける中に、ありしにまさるけふの舞哉、と人のいふを、連歌に取りなして
出でていなばたれか別れのかたつぶり　（誹諧連歌抄）

○折節御前に、磯の禅師が女（むすめ）に、静といへる白拍子、今様を謡ひつつ、お酌に立ちて花葛、かかる姿ぞ類ひなき、舞の袖。　（謡曲「正尊」）

○昔筑前の太宰府に、庵に檜垣しつらひて住みし白拍子、後には衰へてこの白河のほとりに住みしなり。　（謡曲「檜垣」）

○一樹の蔭や、一河の水、皆これ他生の縁といふ、白拍子をぞ謡ひける。　（謡曲「千手」）

○童随身その時に、お酌に立ちて慰めの、今様朗詠す。一樹の蔭や、一河の水、皆これ他生の縁といふ、白拍子をぞ奏でける。（謡曲「住吉詣」）

○さらばその名をあらはすべし。古仏御前と申しし白拍子は、この国より出でし人なり。（謡曲「仏原」）

○又加賀の国より仏御前と申して、これも白拍子にて候ふが、浄海の御目にかかりたき由を申し出仕申され候へども、浄海の御諚には、如何なる神なりとも仏なりとも、祇王があらん程は御対面叶ふまじき由仰せ候ふ処に、祇王の御申しには、いづれも流れをたつるは同じ事にて候へば、御対面なくては叶ふまじき由たつて御申し候ひて、この四五日は出仕をとどめ給ひて候ふ。（謡曲「祇王」）

○仰せに随ひ立ち上がり、まづ悦びの和歌の声、いで祇王御前同じくは、相曲舞に立ち給へ。（同）

○又人の申され候ふは、地獄の有様を曲舞に作りて御謡ひある由承り及びて候ふ。とてもの事に謡うて御聞かせ給へ。（謡曲「歌占」）

○わが子の常は小歌曲舞に好きて、友を集め舞ひ謡ひ候ひし程に、この尉も時々は舞ひ謡ひ候ふ。（謡曲「木賊」）

○これはこの国の傍らに住む白拍子にて候ふ。鐘の供養に、そと舞を舞ひ候ふべし。（謡曲「道成寺」）

○又これに渡り候ふ御事は、ひやくま山姥とて隠れなき遊女にて御座候ふ。かやうに御名を申す謂れは、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作つて御謡ひあるにより、京童の申し慣はして候ふ。（謡曲「山姥」）

○思ひよらずの有様や。ゆく衛もしらぬ旅人と、相曲舞こそ大事なれ。（謡曲「舞車」〈上懸版本〉）

○鳶々舞い上がれ、鼠焼いてつき上げて、白拍子殿こそ舞の手の上手よ、ひと手習おうこんこう舞が舞の手、舞いわ舞うたが後の小歌を忘れた（田植草紙）